

# SUGGESTION '86

## —社会的視点による造形表現—

11月29日(土) PM 5:00~ 於 PARERAGON II

### シンポジウム

#### 「造形表現における社会的視点とは」

- 前回のシンポジウムで提起された諸問題について
- 作家自身のスタンディング・ポイントは確かなものか  
(社会の中で自らをどのように位置づけているか)
- 現代の日本の美術状況について  
(韓国など外国と比べて)
- 社会性と造形性  
(表現の可能性について)

山本伸樹

蜂谷和郎

高柳 星

加藤宇章

美術家及び作品は、その存在自体がすでに社会的事物であり、社会的、経済的、政治的影響を少なからず内に秘めている。歴史的にみても、美術には、その時代の体制擁護の役割を積極的に負うもの、強制的に負わされてきたもの、また逆に体制に対してあえて抵抗するもの、中立的立場をとったものなど様々あるが、おのずとその表現する主題に違いが現れた。一方、その時代の権力者は、美術をたくみにとりこみ、みずからの道具として使おうとし、追随、服従するものに美術界における支配力を与えた。そういった意味からも、美術史の推移は、経済的、政治的機構の変革と共にあった。

現在の日本の美術は、価値観も表現も多面・多様化してきてはいるが、作家自身の身のまわりの社会、日々の人間の生活といったことを大きく置き忘れているのではないか。さらに、芸術は社会や政治と切り離すべきだという風潮すら強い。しかしながら、作家が少なくとも、文化行政、美術教育制度、美術の流通形態等々現実社会と密接な関係をもつ以上、芸術は社会、政治とそう簡単に切り離して考えられるべきものではないだろう。

美術作品を創作し、評価を論ずる場合でも造形美のみを問題にすればいいということではないはずである。生きている一個の人間として、現実の生活の中で様々に揺れ動く心の内や想い(喜びや驚き、悲しみや苦しみなど)を謳いあげ、探り出すことが最も重要な要素なのではなからうか。そういった意味で我々は、社会に対して自らの表現手段をもって、あえて社会的、政治的視点に立った訴えを起こし、またそのことを、あたりまえのこととしてとらえたい。

さらに、我々にとってのよりよい美術を目指すためには、表現や発表形態に新しい可能性を探らんとする意識や行動が必要であると考えます。

橋本 僕が、一番美術家に期待しているのは、勝手さみたいな部分です。たとえば、自給自足で日本の国土の中でも生活してゆくことはたぶん不可能だと思うんです。これだけの人間が地球というちっちゃな中で暮らしてゆこうと思ったら、産業がどんどん起って、お金の回転が行わないと、まず暮らしていけないわけなんです。

核兵器の問題にしても、もう絶対に動かないんですよ。それを壊そうとしたら自分たちの生活全部放棄しないといけないんです。僕の接したボイスにしろ、バイクにしろ、非常にわがままで、勝手だし、だから、世の中の人間全員がてんでバラバラの動きをしたら国家にとって一番恐いわけですよ。

## 現実社会とのコミュニケーション

高橋 現代美術をやっている人間というのは別の仕事をやりながら作品造ってますね。外国でいえば、作品を造りつづけることが仕事であり、ビジネスであり、職業なんですよ。そういう社会的な職業の位置があって、初めて周りの人たちにそういう視点もあると思うんですよ。

高橋 日本以外のところでの作品発表は、殺るか殺られるかって感じですが、評価が書ければもう二度とやれない。そのくらい自分の生き方をかけたものが芸術だという感じです。だからこそ美術が社会の中で職業として成り立つのです。

Dさん

作家と社会とコミュニケーションという点では、職業として成立してないため社会の中に入っていけない、入っていかないから職業として成立しないことが大きな問題だと思います。

## 海外の社会状況と表現者の姿勢

加藤 雑誌のインタビュー記事で読んだのですが、中南米の小説家たちは社会的政治的な問題を必ず作品の中に取り入れているそうです。それはなぜかという質問にその小説家は、自分たちは非常に貧しいとか、軍による独裁やそれに近い状況の中で生きている。だから作家であること以前に、国民として人間として生きていく上でそれらの問題をもう全然無視できない。当然書くんだ。と答えていました。

平戸賢児 (彫刻家) そもそもドイツを含めて欧米というのは、普通一般の人たちが美術に接する機会がすごく多いと思うんですよ。それが日本との大きな違いがあって、たとえばボイスが草の根運動をして、それが波及していったわけは、そういう基盤があって、政党にまで発展していったのだと思うんです。でも、日本を振り返ってみると、美術と日本人の関係はとても貧しいと思うんです。こういう画道に一般の人たちはほとんど入ってこない。欧米では赤ん坊をだいたお母さんが、どこにでも出入りして、自分の見方をして帰っていくわけですよ。とにかくこれを草の根的に始めていくのは非常に難しいと、常々思っていた。

朴

韓国は、非常に政治的な面でも経済的な面でも不安定で、不条理とか矛盾だらけの社会ですが、朴大統領時代、60年代から70年代まで彼が倒れるまでの時代が非常に不条理が多かった。芸術家たちは、社会の中で地位が高いというか、知識をもっている社会の一般の人々をリードすべき人たちだから、矛盾だらけの社会の中でどういふように作品を作ればいいのか、どうすればいいかというふうな動きが、70年代の始めから、詩人、文学者を中心に行われました。それが非常にヒットして、政府の不条理や矛盾を一般の人々が解るようになり、その頃、ちょうど朴大統領が倒れました。その後の政権になり、美術家たちが彼芸術家たちから「あなたたちは同じ芸術家なのに、きれいな絵ばかり書いて家に暮らしていいのか」と文句を言われ、ある芸術家は美術家たちと一緒に作家が社会性を持つ作品を創り始めます。それが5、6年前ですが、一般の国民からたいへん賛同を得られた。今は、そういう方々はみな刑務所の中にいて(笑)、なかなか出られない。韓国の作家たちは、軍管理されています。みんなの話を聞くと、日本の作家が、この社会で作品にどう社会性をもたせようか、どうやって社会にアプローチしようかとしているようですが、日本の作家や国民が日本という社会の問題点やあるいは芯心感をあまりもっていないのではないかと思います。最初に日本に来たとき、今回のような発想がないことがさびしかったけれど、その時点で山本さんと会っているなことを知りました。とにかく韓国の場合、国民がみな痛みを持っている。だから作家は、美術を通していい国を作ろうということと社会性の強い作品を発表したり活動したりしている。どこの社会でも、社会性をしっかりもった作品がある。だからこれからはがんばってほしいです。

橋本 僕が個人的に話をした人々の中にも、Artを一つのかくれみのにして、人間とか社会に対していろいろなことを試みている方はいらっしゃるけれども、それが作品に出てくるかはよくわからないです。

一般的に見てそういう人は少ないわけですよ。どうして日本ではF.I.R.みたいなことができないのか、お聞きしたいな。

橋本 美術による社会的発言という面と、日本とヨーロッパの違いを美術家から見たらどうなんでしょう。動きやすいとか、動きにくいとかも含めて。

加藤 日本の作家は表面的な平和とムードにどっぷりつかって制作しているように思います。

橋本 その一番の元はどんなものなんですよ。

高柳屋（画家） 昨年11月の「社会的視点による造形表現」では、社会をどう見るのかということを実験的な形で表すことによって、自分のポジションを広く置くのかははっきりさせることができました。

## 辻井

僕は社会そのものは、具体的に僕の周辺にあるものと考えますから、作家が具体的に誰それに見せたいという状況でない、社会に対しての強い発言につながらないと思うんです。

具体的には、美術家以外の人たちが圧倒的に多いわけで、その人たちのためにこそ作家は置らなければならない立場にあるかもしれないのに、彼らのごことを考えない状況が本当に危険だと思います。

## 加藤

それと、作家が見せる相手のことをつかんでいないということは、逆に言えば自分の位置づけがちゃんとできていないこととつながっているんじゃないか。僕らのようなテーマで仕事をしていく上で、自分の位置を見直していく作業は大切なことだと思っています。

## 楠田

物を作るなら隣人のため、自分以外の多くの人々のために考えるほうが、自分または人の問題として解りやすいと考えている。制作と社会の関わりにはそういう割り切り方もしています。

## 表現の可能性

### 高橋

ただ、ここには、本当に美術をある程度かじっている人しか来ないわけでしょう。完全に神田の街から隔離されている世界なんです。だから、いくらか問題がテーマとして出たとしても、そんなものなのと同じなんですよ。

ま、一般の社会の中での切り込み、介入のしかたなどというものは、本当にささいなものなんです。ないのと同じなんです。だからいくらか作家が作品を作ったって街のパワーにはかわらないんだから。

### 丸山

神田という地球上の一つの場所。こういう地下に一つ何か表現しようという設定を昔きかされてるのと受け取ってるんです。それと、その作品自体とそれを見ている自分がある。この状態が一つのコミュニケーションの形で、作品なんではないかと思うんです。僕の持論みたいなものですが、この場所を借り、ある期間舞台設定をしていることと、一歩外へ出ると街があり照明灯があり、誰かが歩いてるという現実の社会との関わり自体がなんらかのインパクトを受けさせるだけの力がないと作品表現をしていることの意味性が無いと思う。

### 藤岡

僕自身、この展覧会に対して非常に強く持っている疑問というのは、社会へのアプローチという言葉があるからこそ、こういうふうになら集まって、話をしているんですが、作品から、どれほどそういうことを感じられたかなというのが、確かに疑問としてあったんです。そういう意味では、花の展覧会といわれた印象と、僕が持った印象が同じだったのかもしれないんですが……。

### 真藤

単に作品の中に社会性を取り入れるということ、原爆とか政治とか社会的なものをテーマにするだけなら、限定的環境によって、美術が社会にアプローチするというのは、それだけの問題ではないと思います。

美術家は自分の作品を他人に見せない限り社会にアプローチすることはできない。そうすると、作家の中にも、作品をやるかということともに、どう見せるかという観点から批判に出てくればいけない。つまり、商標とかマス・メディアとかいうことがあるわけで、それはある意味で美術の表現とはべつ次の次元の問題です。だから、作家とはいかなるもので、芸術とはどういふものかという議論だけでは、解決できない問題だと思います。

門田秀夫（編集者） 各自、自分の表現を投げかける対象をかなり明確に持つことができ、社会との関わりという点で個別的に意識を持って、造形活動も社会に直接むき合ってる形での自分の表現を新しく魅力的にかつ刺激的にしている意識は大事だと思います。ただ、表現活動が最終的にできたもの、それ自体が魅力を持たないダメだと思えます。

### 安川

ボイスは嫌いだと言いましたが、やっていることは並の作家じゃない、勝手に、強烈に、好き勝手にやっています。日本の作家は、失敗を恐るあまりに、好き勝手なことをしないんじゃないか、どうしてもそこに対しては必ず不安を持っているわけで、これは作家の宿命です。ただ、もう新しいのではない、ということでの心配をするというのは、作家としてよくないことだと思います。ただ本当に何物かを創り出しているのだろうかということが、作家の本来の不安だと思う。

## 完璧なまでの管理社会と美術家のあり方

谷口 私は、生花作家志向していますが、社会性に関してすごく考えて表現したことはありませんでした。ただ、ある時、美術館でお米を扱って表現しようとした時ストンプがかかって、その時はじめて、社会的なものがガンと前に出てきたという経験があります。それまでは、素材そのものに拘泥したものでしかなかったわけですが、そこで今後、自分がどう社会性を取り入れていなければならないかといういろいろ探している状態です。

高橋 だけど、僕らの生活って非常に管理されているわけでしょう。法的に管理されているし、社員の役割としても管理されているかもしれないし、ごく普通の世界観なんだけど、非常に完璧なまでに管理されている社会なんです。日本の社会って。

そういう管理されている中でね、飛び出した人間がいるでしょ、そうすると、すごく深いでしょう。それは、ゲリラと同じで社会と全然コミュニケーションがないんですよ。

そこで、一つ問題にしないといけないのは、僕たちの回りを取り囲んでいる地域社会とか、自分たちの周りのこともよく客観的に見てみる必要があると思うんです。それくらい強烈だと思いますよ、特に東京に住んでいる人たちなんかは。

### 田中

どんどんシステム化されて、見えない管理をされちゃう社会、確かにその方向に向いていると思うんですよ。

### 丸藤

確かに現代は何かがどう動いているか僕人ではなかなかつかみきれない時代です。マスコミが意図的に情報を流したり、流さなかったりという中で僕らは生きているわけです。

日本では、政治やちょっと重いテーマの話を避けたら非常に傾向が強いのと思えます。僕もそんな話をして嫌たられた経験がたくさんあります。

### D.M.

私は政治的な圧力団体に働いたことがあって、政治家の間を走り回っていました。スゴク怖いことでも政治がからんでいることがよく解りました。だからもっと政治をはっきり見る必要があるということ